

昭和の大横綱 第四十八代横綱



〈写真・横綱大鵬オフィシャルサイトより〉

道内を転々と した幼少期

「横綱と故郷シリーズで、今回は大鵬親方と北海道について連載したいんです。よろしくお願ひします」
筆者は、1980年代の九州場所のある日、雑誌『van van相撲界』（ベースボール・マガジン社）の連載「横綱と故郷」の取材あいさつのため福岡国際センターの理事室を訪ねて、大鵬親方をお願いした。
大鵬はその時、ニヤツとしたが「こんなことを言っていた。『ふる里』についてもねえ、ワシの場合は岩内もあるし、それから訓子府、知床の岩尾別、夕張と1年ごとに変わったんだよ。最終的に弟子屈の川湯に移ったんだけど、どこがふる里といつていいのかわからない。全部回るなら、大変なことになるよ」
樺太からの引き揚げ船「小笠原丸」を降りた納谷一家は、稚内から母キヨの神恵内の実家まで2昼夜をかけてたどり着いた。そしてそこからバスで1時間ほどの岩内に移り住んだ。キヨの弟が住んでいた。
当時の岩内はニシン漁などが盛んで江戸時代に開かれた漁港は大きな船も出入りし、町はにぎわいを見せていた。
親類の世話で「物置小屋のような一室」の間借り生活が始まる。
終戦後の混乱期で、食糧難は

大鵬 知られざる軌跡

〈第3回〉道内を転々川湯が「ふる里」か ●ジャーナリスト 黒田 伸

(文中写真も筆者)

深刻だった。キヨは洋服の仕立てで生活を立て直そうとしたが肝心の生地がなかった。
そこで漁師や商家の家の手伝いをしながらわずかな手間で家族を食べさせた。幸喜の12歳年上の兄幸治は、農家に住み込

そんな中、地元の小学校の教員だった住吉儀一という男性と交際が始まり、やがて結婚する。男性は子ども2人を抱え、母親を必要としていた。
この時、農家に働きに出ていた兄は納谷姓のまま母や幸喜らは住吉姓となった。
板にくぎを打ったもので引っ掛けてよく失敬した。子供心にやたらに骨が多い魚だとは思った。
こうした生活の経験が大鵬の相撲人生の根底にある。苦しさや貧しさがあっても、助け合い、分け合って生きていく。
当時の教員が辞令一つで道内のどこへでも飛ばされていたため、義父とともに毎年のように住む場所と家が変わった。
幸喜が2年生になると道東の訓子府小学校に転校した。岩内から訓子府まで当時だと2日ほどかかる。そこにも1年もいなかった。次の赴任先は知床の岩尾別だった。

苦しさも 助け合って

当時の生活ぶりを大鵬は引退後、日本経済新聞の『私の履歴書』で次のように語っている。
「食べるのに大変な時代で双方が一緒になって助け合う生活だった。私は姉と日曜になると木炭車のバスに乗って兄の奉公している農家にカボチャやジャガイモをもらいに行った。
春には山と積まれたニシンが荷馬車からこぼれるのを拾った。



▲弟子屈町川湯にある「大鵬相撲記念館」の入口

終戦から2年も経っていない。教科書もざら紙で薄かった。通信簿の成績は国語、算数、理科、音楽、図工、体操とも「普通」。痩せてひよるひよるとしていたが「栄養状態可」と書かれていた。
キヨは夜遅くまでミシンを踏んで洋服の仕事をこなした。進駐軍の放出物が出回り毛布やオーバーを洋服に仕立て直す仕事 came。



続きは『月刊クオリティ』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)